12月 園だより かけはし

キッドワールドこども園
令和６年１１月 30日

あっという間に時は過ぎ、今年も締めくくりの月を迎えることになりました。

子どもたちは、園生活や行事(運動会)を過ごす中で、頑張る気持ち、友だちと１つの目当てに向かって最後まで取り組む気持ち、楽しんで参加する気持ち等、心と身体の成長が大きく見られました。また、園外活動では、公園や神社に行き、どんぐりや落ち葉を集めて、自然物を使って遊ぶ中で、並べたり、転がしたり、様々な形の違いに気づいたりしてしっかり五感をつかって楽しみ、園内では経験できない活動も行っています。

さて、12 月は、0･1 歳児の生活発表会、もちつき大会、クリスマス会などこどもたちにとって楽しみなイベントが待っています。こどもたちの興味や関心を満たし、それぞれの発達に寄り添った関りを心掛けていきたいと思います。

行事予定

日	曜日	園児に関すること
2	月	身体計測(1･5歳児)
3	火	身体計測(2･4歳児)、発表会リハーサル(0 歳児)
4	水	身体計測(3 歳児)、発表会リハーサル(1 歳児)
5	木	Kids English
12	木	避難訓練、Kids English
14	土	生活発表会(0･1歳児)
18	水	避難訓練(大地震･大津波)
19	木	健康診断、身体計測(0 歳児)、Kids English
20	金	もちつき大会、弁当日
24	火	クリスマス会
26	木	誕生会

もちつき大会について

杵と臼を使いもちつきをする家庭をあまり見ることができなくなってきていると思います。

園児には、杵と臼を使い実際にもちをつき丸めたり、伸ばしたり、出来立てのおもちを匂ったりする経験をし、楽しんで欲しいという思いから、当園ではもちつき大会を行っています。

園では、もち米とサツマイモを混ぜ喉に詰まらないよう、安全に十分気を付けていきながら、日本の伝統行事を行っていきたいと思います。

お知らせ･お願い

※　12月の弁当日は、20日(金)です。子どもさんが楽しみにしています。忘れないようにお持ちください。

※　12月の保育料の納入期間は、19日（木）･20日（金）･23日（月）の３日間です。
(期限内に納入できない場合は、教頭の奥下の方へご相談ください。)

イヤイヤ期の子どもの発達とその受け止め

キッドワールド総合園長　牧野　桂一

親や周りの大人の言うことをなかなか聞いてくれない子どものことがよく話題になります。そのような自己中心的で反抗的な子どもたちの育ちの姿を「イヤイヤ期」というのだそうですが、今回はそのことについて考えてみたいと思います。

私たちが心配する「自分の考えが全てで自分の都合が一番」という行動は、心理学的に見ていくとその大半が、乳幼児期に形成されると言われていますので、子どもと関わる私たち大人としてもとても大切な問題になります。

自己中心的で自分の考えだけを押し通して、他人の考えを認めないということは、一般の社会ではおそらく成り立たないと思われます。私たちの住む社会には、いろいろな人がいて、様々な価値観を持ち、それをお互いに大切にしながら自分の考えを主張する。つまり主体的ではあるけれども、自分と異なる他者と共に生きることができる社会を目指すことが求められているのです。そういったことを、人格の基礎ができる乳幼児期の育ちを通して、どのように行えばいいかということが「イヤイヤ期」の子どもへの向き合い方の基本です。

赤ちゃんは、周りの大人にいろいろ働きかけながら育っています。周りの大人は子どもたちの気持ちを理解し、それに応答的に対応していきます。そういう関わり方の積み重ねで、子どもは大人の気持ちを自分の中に取り込むことができます。そのようにすることによって、1歳半ぐらいまでに子どもが外の世界に興味・関心を持つようになっていくのです。そして1歳半から3歳ごろになると子どもの中に自我の世界が育ち、それが徐々に確かなものになっていきます。

このような時期にあたる2歳児というのは、周りからみてみると手に負えないくらいに自己主張が強く周りを困らせ、相手をするのがとても難しくなります。「僕はこうしたい」「私はこうしたい」と言いだしたら、それを引っ込めることなく、自分のしたいことにこだわり続けます。経験の深い大人ならば、せっかく作ったご飯を「嫌いだから食べない」というように意固地に子どもが主張したとしても、その子どもをきちんと受け止めることができます。どんなわがままに見える自己主張も、「あなたは自分のしたいことをこんなに主張できるようになったんだね」と言いながら、どこまでも受容的に受け止めていけるのです。このことは途方もなく難しいことですが、子どもと関わる大人には必要不可欠なことです。そのように受け止める感性が様々な人と共生して生きていけるような生き方を育てていくことになり、「人の話を誠実によく聞く」ことができるようになり、「自分のしたことには責任を持ち、相手に理解して貰うように丁寧に説明する」ことができるような人間の基礎を育てていくのです。

「イヤイヤ期」の子どもであっても「僕、人参嫌いなの」なんて言った時に、「そうなの、人参苦手なんだね」というように、子どもよりも少しゆっくりめに、優しい小さな声で喋ると、子どもは受け止められているという実感を持ちます。すると子どもも満足し、ちょっと偉そうにふるえます。「僕、嫌いなの」なんて威張って見せるのです。そこで大人が「威張っている場合じゃないでしょう、食べなさい」なんて押しつけるような言い方をすると駄目になってしまいます。そこは、子どもの言葉を肯定的に受け止めて、「でもね」と優しく切り返していくことが必要なのです。そうすると子どもの中に受け止められて返してもらった世界が、社会的な知性、あるいは社会的な自己に育っていきます。これを心理学的には「第二の自我」というように言っているのですが、これが2歳の頃育ち始めて、3歳を過ぎる頃には、イヤイヤ期を卒業していくと言われています。

3歳を過ぎた子どもが、自分の内側を向いて自分と対話しながら生きるということはかなり難しい面があります。子どもたちの中に心地よく、この二つの自我世界をつないでいくことは周りの大人の大切な役割でもあるのです。